

時計と窓の話

小川未明

青空文庫

わたしの生まれる前から、このおき時計は、家にあつたので、それだけ、親しみぶかい感があるのです。ある日のこと、父が、まだ学生の時分、ゆき来する町の古道具屋に、この時計が、かぎつてあつたのを見つけて、いい時計と思い、ほしくてたまらず、とうとう買ったということです。

「これは、外国製で、こちらのものでありません。ある公使の方が持つて帰られました。その方が、おなくなりになつて、こんど遺族は、いなかへお移りなされるので、いろいろの品といっしょに出たものです。機械は正確ですし、ごらんのとおり、どこもいたんでいません。」と、そのとき、店の主人は、いったさうでした。

父は、主人のいうことを信じ、ほり出しものをしたと喜んで、これをだくようにして、自分のへやへ持ち帰りました。

私は、父から聞いた、そんな遠い昔のことを考えながら、いま自分の本だなのついている時計をながめていました。外国から、日本へわたり、人の手から人の手へ、てんてんとして、使用されてきたので、時計も、だいぶ年をとつておもうと思ひました。

たとえ、古くなつても、その美しい形は、かわらなかつたのです。四角形というより

は、いくらか 長方形で、金色にめっきがしてあり、左右の柱には、ぶどうのつるがからんでいて、はとのとんでいる浮きぼりがしてあるので、いつ見ても平和な、しずかな感じがするのでした。

私の本だには、教科書や、雑誌や、参考書などが、ごつちやにはいつています。

壁には、カレンダーがかかっているし、へやのすみには、野球のミットが投げ出してあって、べつにかざりというものがなかったから、この時計だけが、ただ一つ光って、宝物のように見えました。

母も、そう思っていたようです。しかし、母が宝物と思つたのは、多少ぼくが思つたのと、意味がちがうかもしれません。なぜなら、父と母が、家を持つたははじめのころは、まだいまの大きな柱時計もなくて、このおき時計ただ一つがたよりだったからでした。毎朝、父は、この時計を見て出勤したし、また母は、この時計を見て、夕飯のしたくをしたのでした。そして、時計は、休みなく、くるいなく、忠実に、そのつとめをはたしたのです。

けれど、ぼくが生まれて、学校へあがる時分には、いつしか、茶の間の柱へ、大きな時計がかかって、時間ごとに、いい音をたてたり、すべてご用をたすようになっていたの

で、この金色のおき時計は、忘れられたように、父の書齋で、書だなの上にのせられたまま、ほこりをあびていました。

私は、ほこりをあびて、止まっている時計を見るたびに、なんだか、かわいそうに思い、人間のかつて気ままに對して、腹立たしくさえ感じました。

「おとうさん、あのおき時計をもらつても、いいでしょう。」と、私は、たのみました。

なぜか、父は、すぐにやるといわなかつたのです。それを無理にたのんで、私は時計を自分のへやへ持つてきました。その当座のこと、母は、そうじをしに、私のへやへはいつてこられると、おき時計をごらんになつて、

「これは、いい時計ですから、だいじになさい。」と、いわれたのでした。さも、子どもが持つような品でないといわれるようでした。

「なにしろ、正ちゃんの生まれる前から、家にあるのだし、おとうさんが、だいじにしていられたのですからね。それに、この時計を見ると、平和な感じがするでしょう。」と、おかあさんは、いわれました。

「ぼくも、そう思うんです。しかし、時間は、正確なんですか。」と、私は、いいました。

いつか、山本くんが遊びにきて、ラジオを聞きながら、この時計を見あげて、「おや、この時計は、おくられているのだね。」と、いったことがあるからです。

「それは、正確でしょうよ。おとうさんが、外国製のいい時計だと、いつもほめていらしたのですから。」

母は戦時中、この時計を疎開先へ持って行って、こちらへ帰ると、時計屋へみぎに出したと、そして、それがなかなか手間どるので、父が再三さいそくにいったことなど、思い出しました。

「なるほど、いくらいい機械でも、長い間には、はがねがすれて、へってしまおうだろう。」と、父は、持って帰った時計をながめて、いつていました。

「どうかнатたのですか。」と、おかあさんが、そのそばへいくと、

「昔の機械は、いたんでも、とりかえができぬから、こわれれば、それまでだということだ。これは機械にかぎらず、なんでもそうだろう。しかし、まだ役にたちそうだから、このままにしておきましょう。」と、そのとき、父がいったことを思い出したので、

「あちらのものは、こわれると、こちらでは直されないといいいますから、こまりますね。」と、母は、いいました。

このことばを聞くと、ぼくは、外国品だけに、かえって、不安な気がしました。いくら宝物のようにだいいじにしても、時計であるかぎり、時間がくるえば、まったく価値はなくなると思つたからです。

ある日、他の学校と、野球の試合をするので、正二時に、グラウンドへ集まる約束をしました。ぼくは、すこし早めにいったつもりなのに、もうみんながきて、ぼくのくるのを待つていました。

「正二時といったのに、君がこないから、どうしたのかと思つていたよ。」と、一人が、せめるごとくいいました。

「そのつもりで、きたんだが。」と、私は、どうして、おくれたのか、ふしぎに思つたのです。

「正ちゃんの時計は、やはりおくられているのだ。ラジオのほうが、まちがっているなんて、君はおかしなことをいつたよ。ちようど、日本が世界じゆうでいちばん強いと思つていたのと、おんなじなんだぜ。」と、山本くんが、じようだんをいつて笑いました。それをきいて一同が笑い出しました。ぼくは、そういわれると、さすがに、はずかしくなりました。父の自慢した時計が、やはり正確でなかつたのかと思つたのであります。

家へ帰ると、さつそく、柱時計と、おき時計の時間を見くらべてみました。やはり、十五分ばかりちがっていました。いままで、こんな研究をしなかったことにも、落度がありました。

「おとうさん、あのおき時計は、くるつていますね。」と、ぼくは、父にむかっていいました。

「そうか。進むのか、おくれるのか。」と、父は、聞きかえました。

「外国製の正確な時計とばかり信じて、ラジオのほうをちがっていると思つたのですが、いま見ると、やはり、おくられているんです。」

そう、ぼくがいうと、父は、笑い出して、

「そんなことをいうと、笑われるよ。標準時にあわせてあるので、ラジオのほうがいつも正しいのだ。この時計をみがきにやって、長くかかったのも、そんなことだったろう。……時計屋では、下へ落としたりすることがないかといっていたから。それでなくても、長い間には機械がすれて、くるいがかかるので、もう、昔のように、直らないかもしれない。」

こう、聞くと、私のいままでのほこりと喜びは、たちまちきえてしまいました。しかし父はこういったけれど、まだ時計に対して、いくらか未練を持っているようでした。

「時間じかんが正確せいかくでなければ、家宝かぼうでも、なんでもありませんね。」と、ぼくがいうと、父ちちは、

「しかたがない。なんにでも、寿命じゆみょうというものが、あるからな。」と、さびしそうに、いいました。

「このごろは、日本にっぽんでも、いい時計とけいができるから、そのうち、新しいのを買かつてやる。」と、いつて、さすがに、父ちちは、いつまでも価値かちのないものに、こだわるようすはなかったのです。

私わたしは、あまり、あきらめのいいのを、かえつてもものたりなくさえ感じかんました。

「おかあさんも、平和へいわな感じかんのするいい時計とけいだとおっしゃったが、ほんとうにおいしいことですね。」と、父ちちにむかつて、いうと、

「いや、時計とけいは、時間じかんを見るものだ。かぎつておく、こつとう品ひんではない。もうちつと、待つておいで、いいのを買かつてやるから。その前まえに、おまえのへやを直なおしたいと思おもつているのだ。」と、父ちちが、いいました。

それというのは、ことし三年ねんせい生せいになった妹いもうとが、まだ自分じぶんのすわる机つくえを持もつていないので、いつも茶ちやの間まのちやぶ台だいや、えんがわで、かばんから本ほんを出だして、勉強べんきやうしている

のを見て、母は、かわいそうに思つて、

「よし子ちゃんにも、一つ机を買つてやらなければ。」と、いったことがありました。父も、

「正吉のいる、四畳半で、二人が勉強するにはすこし暗すぎるから、新しく窓をつけてやりたい。」と、母に話しているのを聞きました。

「時計よりか、へやの明るくなるほうがうれしいです。」と、ぼくは、いつて、なぜ早く、妹のことを考えてやらなかつたらうと、自分をはずかしく感じました。

「大工のつごうで、すぐにしてやるよ。」と、父がいました。思いがけない二つの喜びが、一時にやつてきたようで、私の胸はおどりました。

「こんなに、私たちのことを思つてくださるのか。」と、心のうちで感謝したのです。東にしか窓がなかつたのを、西にも窓がつくと、同じへやとは信じられないほど、明るくなりました。しかも、その窓からは、これまで見られなかつた森や、電信柱や、遠くの高い煙突までが、さながら、油絵を見るように目にうつつたのです。この新しい風景は、ぼくの気持ちをも、どんなに引き立たせたかしれません。

「これから、うんと、勉強ができるぞ！」

「にいちやん、ごらんささい。あんなに雲くもがきれいなこと。」と、妹いもうとが、森もりのいただきをさして、呼びかけました。

「あ、きれいだね。よし子こちゃん、クレオンで、あの雲くもを写生しゃせいしてごらんよ。」と、ぼくは、心こころが空そらへむかつて、とび立つ思おもいがしました。

こうして、いきいきとした自然しぜんを見ると、たとえ、どんな平和へいわな景色けしきでも、時計とけいについている動うごかないかざりを、感嘆かんとんして見る気きがしなかったのです。それに、時間じかんが不正確ふせいとわかると、そばにおく気きはもうなかったのです。

「こんどは、いい時計とけいが、早くはやほしいな。」と、ぜいたくと知りながら、妹いもうとにむかつて、私わたしは、希望きぼうを話はなしたのでした。

この希望きぼうも、たちまち達たつせられたのは、十何年なんねんか前に、父ちちが、おき時計とけいを買かった、古道具屋ふるどうぐやの主人しゅじんが、有田焼ありたやきの大きな丸火鉢まるひばちを、とどけてくれたからでした。

「ご苦労くわうらうさま。」と、母ははは、ねぎらいました。

父ちちは、おくから出でてきて、

「この時計とけいですよ、覚えおぼがありませんか。公使こうしの方が持もち帰かえられたとかいうのですが。」と、主人しゅじんに見みせました。

「そんなことがありましたかな。十年といえ、いや、私だつて、このとおり頭がはげましたから、時計が、いたむのもむりはありません。このごろ、日本製でいいのができました。このさい、おとりかえなさるほうが、およろしいかもしれせん。」と、主人はいいました。

「こんなになつても、買う人がありますか。」と、父が聞きました。

「それが、おかしなもので、外国製というので、買っていく人がありますから。」と、主人は笑いました。

「ただ、かざりにするなら、この時計は、りっぱなものだ。」と、父も、笑いました。

主人が時計を持ちさつてしまつてから、わずか二日ばかりの内に、父は、日本製の新しい目ざまし時計を買つてきてくれました。いかにも、はりきつていて、元氣よく、めざまし時計は、シャン、シャン、と、ひびきをへやじゆうにたて、黒い針は、数字の上をまことに正確にさしたのでした。

「このほうが、いいわ。私たちまで元氣になつたようね。」と、妹が、光つた時計を見上げて、いったのです。

「そうだね、ぼくたちまで、ぼやぼやするなど、いわれているようだね。」と、私が、い

うと、

「やはり、がいこくせい外国製？」と、いもうと妹が聞きました。

「むろん、にっぽんせい日本製さ。それだから、がいこく外国にまけるな、むだに時をときすごされないぞと、
 知っているじゃないか。」と、わたし私は答えて、いまにっぽん日本がびんぼう貧乏でくる苦しいのをいもうと妹にせつめい説明
 して、むかし昔のようにふたたび立ちあ上がるのには、ぼくぼくたちが、しっかりとしなければならぬの
 を、おし教えてやりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

初出：「小学五年生 4巻6号」

1951（昭和26）年9月

※表題は底本では、「時計《とけい》と窓《まど》の話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

時計と窓の話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>